昭和二十五年度秋季公開講演會

學會主催の秋季公開講演會は、十月十三日本學開校記念式の後に、本學講堂で開催された。先づ野上學務部長挨拶、次で本學多屋教授、京大長尾助教授の講演あり、正午盛會裡に散會した。以下は講演の要旨である。

女房としての紫式部

本學教授　多屋頼俊

「源氏物語の作者紫式部が一條天皇の中宮彰子に女房として仕へはじめたのは、寛弘四年(西暦一〇〇七)十二月二十九日のことと推定せられてゐる。それから、長和二年(一〇一三)五月二十五日まで仕へてゐたことは確實である。而して「源氏物語」が何時つくられたかについては諸説あるけれども、私は宮仕以前既にできあがつてゐたものと考へてゐる。

さて中宮彰子に仕へてゐた女房は四十人前後ゐた。女房の仕事は、一般に主人への他人の言葉を取りついだり主人のお傍で宿直をしたりなどすることなのである。がそれと同時に、そのやうな仕事の間に於いて、主人を補佐し、他の后、女御等を壓倒し、後宮で主人が大きな勢力を有するやうに主人をもりたてゆく、それが女房のより重要な任務なのであつた。從つて后、中宮、女御等の後援者達は競つて才媛をあつめて宮仕させた。紫式部もそのやうにして召されたものの一人であつたのである。

清少納言はよく紫式部と比較される人であるが、「枕草子」で明かなやうに、彼女は、宮仕してゐるといふことに誇りを感じ、得意げに振舞つてゐたのだつた。ところが紫式部は、初めから女房としての生活に興味を覺えず何の誇りをもたず、逆に後宮に仕へて世間馴れをし人ずれしてゆく自分を眺めては、嫌惡の情をさへ懷いてゐたのであつた。式部の日記によれば、例へば道長や公任などの如く、紫式部に近付かうとする男もあつたのであるけれども、式部は應じなかつたやうである。彼女は、同僚の女房達の色めいた行動に羨しさを感じないではなかつたが、自らさうした世界に入らうとはしなかつたらしい。彼女は華やかな宮廷にありながら、しかも孤獨な生活をしてゐたのである。

ところで中宮をはじめ他の女房達は、式部をどのやうな目でみてゐたであらうか。彼女達は最初式部を甚しく敬遠してゐた。それは式部が、「源氏物語」の作者として既に名ある人であつたからであらう。だが實際に交際してみると、豫想に反して、式部が穏かな腰の低い人であつたので彼女達は驚いてゐる。蓋し式部は同僚から十分敬遠せられるに値する廣い知識と高い見識と堅い自信とをもつてゐた。しかし宮仕したのちの式部は――こつそり中宮に「白氏文集」の樂府をお教へ申上げたことはあつたけれども――人の前では「一」といふ文字すら書かず、屏風に書いてある文字など讀まぬ顔をしてゐたのである。それは所謂「能ある鷹は爪をかくす」といふやうな類ではなくて、式部自身は、自分の豐富な知識などを却つて煩はしく

思ひ、それを捨てようと努めてゐたのである。右のやうな二面が式部にあつたことは注意されねばならない。

さきに述べた如く、式部は華やかな宮仕生活になじむことができず、内面的にはさびしい生活をなしてゐたのである。なぜなのであらうか。思ふに同僚達の間に於ける紫式部はいはば子供達の中の大人であつた。彼女はその高い見識と廣い知識との故に、どうしても他の女房達とはうちとけあふことができなかつたのであらう。それはまさに天才の孤獨といふべきである。

天才が狂氣となることはよくあることだ。紫式部は、しかし佛教によつてそのやうになることから救はれたといつてよい。彼女は宮仕以前から佛道に入りたいと願つてゐた。そして彼女の日記の例の書簡文といはれてゐるところには、明かにその彼女の氣持がかなり具體的に進んでゐることが認められる。

人、といふともかくいふとも、ただ阿彌陀佛にたゆみなく經を習ひ侍らむ、世のいとはしき事は、すべて露ばかり心もとまらずなりにて侍れば、聖にならむに懈怠すべうも侍らず。

とも彼女はいつてゐるのである。自體、式部のやうな人にあつては、佛道に入るより外に道はないのであるが、しかし彼女はしかもその道を著實に一歩一歩進んでゐたのであるといふことができる。

宗喀巴の中論釋について

京大助教授
文博　長尾雅人

中論乃至中觀學の研究は、わが國に於ても最近二三十年間に長足の進歩を遂げたと思はれる。すなはち從來のように三論宗の教學を通じて中論の所説を窺ふのみではなく、直接原典の研究が行はれ、その成果が上りつつあるからである。中論の註釋としては、漢譯の青目釋などの外に、印度から西藏への傳承に於いて、龍樹の自釋と稱せらるる無畏註をはじめ、佛、護、月稱、清辨その他の八本の註釋が作られたといふ。その中、梵本の現存するのは月稱(Candrakīrti)の淨明句論(Prasannapadā)のみであつて、中論研究には常に之が中心となるであらう。然しここに擧げる宗喀巴のものは、いはば第九番目の註釋として亦異つた價値を荷ふものである。

宗喀巴(Tson ka pa, A. D. 1357-1419)は西藏の宗教改革者であり、黄教の開祖であるが、彼は學者としても高く評價せらるべき人である。彼の大體の學問的立場は、中觀派、特に月稱の系統に屬する。その數多くの著作の一として、中論釋(北京版にて約二五〇枚)が見出されるが、之は本偈に對する忠實な註釋であり、その解説の仕方や思想的立場は、月稱を終始學ぶものの如くである。然しながら理長爲宗の態度を以て清辨その他を廣く引用し、そこに宗喀巴自身の立場——中觀學の發展した段階——を認め得るであらう。一讀して氣付く特色は、全體に對する詳細な科文が與へられてゐることであつて、義解の態度が進歩した段階にあることを示してゐる。その他、特に歸敬偈を重んずること、中論を學ぶ上の適切な次第順序が説かれてゐること、所謂二種の否定(pratiṣedha 遮遣)の論理が大きくとり上げられてゐることなどが我々の注意をひく。